

《書評》

都馬バイカル編著 『スウェーデン宣教師が写した失われたモンゴル』

桜美林大学叢書、論創社、2021年、ISBN978-4-8460-1960-0

小長谷 有 紀

本書は、モンゴル高原南部で宣教活動に従事したスウェーデン宣教師エリクソン（Erik Joel Eriksson / 1890-1987）が自ら撮影した写真およそ1300枚の中から、500枚あまりを選んだ写真集である。以下、故人については敬意をこめて敬称を略すこととお許しいただきたい。

ヨーロッパからモンゴルへの伝道としては、カトリック系のCICMから派遣されてオルドスに滞在（1906-1925）したアントワヌ・モスタルト（Antoine Mostaert / 1881-1971）が知られている。一方、プロテスタントの英国国教会は1795年に設立したロンドン伝道協会からジェームス・ギルモア（James Gilmour / 1843-1891）を北中国に派遣（1870-1891）していた。彼の布教活動はキリスト教徒を得るという点ではほとんど成果がなかったけれども、その著作『蒙古人の友となりて』（原著は1883年刊）が多くの読者を獲得し、ラーソン（Frans August Larson / 1870-1957）のモンゴル派遣（1893年）などにつながった。本書の編著者であるバイカル氏は、ラーソンを「スウェーデン宣教師たちによるモンゴル地域での宣教活動のフロントランナー」（同書ivページ）と位置付けた上で、その後のスウェーデン・モンゴル・ミッション（SMM）の誕生から挫折までの経緯を詳細に紹介している。

SMMの最初の拠点は1908年にハローン・オス（現在の中国内モンゴル自治区ウランチャブ盟化徳県朝陽郷新囲子村）に創設された。そして、宣教師のエリクソンは1913年から1938年まで四半世紀を草原部で暮らし、医師として治療行為に従事するほか、福音書をモンゴル語に翻訳し、一部印刷した（『日本とモンゴル』53-2号参照）。こうしたミッション活動を含めてさまざまな事象が撮影された写真は、現在、オンラインで公開されている。

<http://www.alvin-portal.org/alvin/view.jsf?pid=alvin-record%3A81400&dswid=-2182>

ただし、階層構造が複雑で、写真の全容を確認するのは難しい。そこでこれらの写真を書籍として公開する許可を所蔵先のウプサラ大学から得て刊行されたのが本書である。これまで資料整理にあたってきたローゼン博士（専門は朝鮮語）の目録では10分類（同書iページ）となっているのを、大きく6つに再編成し、わかりやすくなっている。